

おわりに

2014 年度一橋祭研究「日本の高速鉄道輸出を考える」をお読みいただきありがとうございます。高速鉄道の輸出に焦点を当てた研究は当会では初めての試みであり、資料収集から結論部の議論に至るまで多くの困難が伴いましたが、無事に一冊の研究誌にまとめることができました。

今年の研究は、「地域と鉄道の関わり」を中心に上げてきたここ数年の一橋祭研究の流れとは異なりますが、日本の鉄道を将来に持続させていくためにどのようなことができるのかということについて考えた点は同じです。

「はじめに」でも述べました通り、東海道新幹線開業 50 周年を迎えた今年、日本で培われてきた高速鉄道の将来について立ち止まって考えてみる良い機会になると思います。日本の高速鉄道の代名詞である「新幹線」はその技術的水準や信頼性の高さでは申し分ないのにもかかわらず、海外輸出が円滑に進んでいないのはなぜなのか。そこにはどのような課題があるのか。そうした問題意識からこの研究は始まりました。研究を進める中で見えてきたのは、「日本の技術は素晴らしい」という精神論だけでは輸出は成功しないということです。どのような輸出形態にするのかということに加えて、輸出先の国の政情不安や財政不安など様々な要因を冷静に分析し、最適な形で輸出が求められるのが、高速鉄道だということです。

多くの手間と時間をかけて実現していく高速鉄道輸出は、今後の日本に本当に必要なのかという問いも出てくるかもしれません。たしかに、日本の高速鉄道を今後も発展させていくための方法としてあげられるのは、海外輸出だけではないと思います。しかし、高速鉄道の輸出は「鉄道」という領域を超えた政治外交分野と密接に関連し、国際政治の場において「道具」として用いられていることも事実です。石油や鉱物資源に乏しく、人口減少で市場規模も縮小していく日本の将来を考えると、高速鉄道のような重要インフラを海外に輸出していくことで政治的・経済的な利益を享受

していく方法を模索していかなければいけないのではないのでしょうか。

日本の高速鉄道輸出はまだ始まったばかりです。現在進行形の輸出計画も数多く存在しています。昨今高速鉄道輸出に関するテレビ報道や雑誌の特集記事などを目にする機会が増えているため、これらメディアなどを通じて最新の高速鉄道輸出の動向にぜひ注目してみてください。

高速鉄道の輸出は、これから幾多の困難に直面すると思われませんが、他国の例や国と企業の緊密な連携などによって乗り越えられるものと信じています。そしてこの研究が日本の高速鉄道輸出に際しての課題解決に少しでも寄与することができれば幸いです。

最後になりましたが、本研究誌をお読みいただいた皆様、一橋祭にお越しいただいた皆様、締め切りと格闘しながら研究誌を執筆してくれた部員に改めてお礼申し上げます。

一橋大学鉄道研究会第 52 代部長

Ak12